

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 15
2019.10

私を変えたロシアの図書館

研究と教育という仕事柄、その時々に応じて親しんだ図書館は多いが、私にとって一番思い出深い図書館といえば、やはりロシア・サンクトペテルブルグのロシア国立図書館である。この図書館での調査が現在の私の研究の方向を決めたといっても過言ではないからだ。

私は卒論、修論で日本近代文学の中の萩原朔太郎について書き、その後、石川啄木の研究を続けていく中で興味深いニュースに接した。それは日露戦争で亡くなったマカロフ提督を悼んだ石川啄木の「マカロフ提督追悼の詩」の一節が、サンクトペテルブルグの沖合約30kmの所にあるコトリン島のクロンシュタットにあるマカロフ提督像に刻まれているというものだった。啄木研究者としては遠くロシアにまで啄木の詩が刻まれた像があることに感嘆すると同時に、敵国の詩人の詩を刻んだ経緯について興味を持った。いつか調べに行きたい、と考えていたところ、そのニュース自体の信憑性が揺らいだ。つまり、どのような詩が刻まれているのか、また、その詩は本当に啄木の詩なのか、ニュースソースが不確実なことがわかったのである。そこで私は自らの目で確かめるしかないと考え、1994年11月、単身ロシアに渡った。

日本文学を専攻していた私はロシア語の口の字も知らなかったが、当時は許可なくしては入ることのできなかったクロンシュタットへ行く許可証と通訳を旅行社に特別に手配してもらい、ロシアに向った。11月中旬でもプラットフォームの気温計はマイナス23度を指していたことを今でも鮮やかに思い出す。そして、西に傾く太陽が一面に凍ったバルト海を佻しく照らしていて、その心細さは例えようがなかった。島に渡る一本の長い軍用道路の途中には検問所があり、許可証を見せている間感じていた、兵士が肩にかけた銃をいつこちらに向けるかもしれないという恐怖心は今でも忘れられない。クロンシュタット島に辿り着き、聖堂横の広場に佇むマカロフ提督像を目にした時、私はやっと辿り着いたという安堵感と不思議な懐かしさで一杯になった。しかし、



▲クロンシュタットのマカロフ提督像
(台座に詩が刻まれている)

国際教養学科

教授 安元 隆子



急がねばならなかった。クロンシュタットの滞在を許可された時間はわずかだったからだ。マカロフ像の台座には確かに詩が刻まれている。私は早速、詩を写したが、詩には作者名がなく、詩の内容も啄木の詩と確定するには明らかに根拠に乏しいと思われた。

私はこの後、マカロフ提督像の詩が啄木だと主張するロシアの歴史小説家、グザーノフ氏にその根拠を問うた。彼は啄木詩のロシア語翻訳者として著名なベラ・マルコワ氏の翻訳と像の詩を比較し、あくまでも像に刻まれた詩は啄木詩の意識であると主張した。その理由は主に次の二点であった。まず、詩の中の「北の勇士」という言葉はロシアより南の人々が使う言葉であり、ロシア人は自らを「北の人」とは表現しない、というもの。そして、像の詩と啄木詩には同じ意味の言葉やフレーズが用いられているというものだった。

この2点を検証するために私は4か月後、再びサンクトペテルブルグに向かった。私は友人となったナターシャさんの助けを借りながら、サンクトペテルブルグの国立図書館に朝から晩まで通い、文献にあたった。

まず、グザーノフ氏の示す二つの根拠のうち、詩語の共通性、つまり「海」や「海の底」、「夜の嵐」などの言葉はマカロフ提督の最期を考えればどの詩人でも使う可能性のある言葉であり、この点を根拠にはできないと私は考えた。次に、ロシア人は自らを「北の人」と呼ぶことはないという点について。これは検証が難しいかと思われたが、それほど苦勞せず覆すことができた。近代ロシア文学の確立者であり国民的詩人のプーシキンの詩の中に使用例を見つけたのである。「冬の朝」という詩にはロシアを「北の国」と表現し、サンクトペテルブルグの街を「北の国々の精華」と表現しているのである。これで詩語の点からロシア人の詩ではなく啄木の詩だと断定することはできないことが明らかになった。

また、新聞「クロンシュタットスキイ ベスニック」を調べてわかったのは、マカロフ提督像は皇帝ニコライ2世がマカロフ提督を慕う国民の代

表ヴィルンの希望を聞き入れ、1913年に設置されたということだった。像はシュルプトの作であり、マカロフは指導者の形で立ち、手はまっすぐに北を指し、足元には形作られた波が日本の龍をイメージしている。マカロフ提督を海の底に引きずりこもうとする姿を描写しているという。そして、像にはマカロフの最期となった戦艦ペトロパブロフスクの破滅の様子と共に、問題の詩も刻まれていることがわかった。

そして、1974年の新聞「ラボチイ クロンシュタット」のマカロフ提督の命日に寄せる記事の中に、1913年3月31日の「クロンシュタットスキィ ベスニック」の記事を基に、詩の作者のイニシャルは「M. F.」である、との記載があることを見つけた。そこで調べてみると、確かに1913年3月31日の「クロンシュタットスキィ ベスニック」には多少の異同はあるもののこの詩が掲載されており、末尾には「M. F.」のイニシャルが記されていた。この「M. F.」について知るために、イニシャルから引くことが出来る事典、また、1912年の海軍の会員名簿も調べてみたが特定することはできなかった。

マカロフ提督像の詩の作者は本当に「M. F.」なのか、そして、啄木詩との関係を明らかにするために、私は「街の彫刻の博物館」を訪れた。日本ではこのような博物館は珍しいと思われるが、この博物館にはサンクトペテルブルグのすべての彫刻についての資料が集められていた。ここでは大きな成果を得ることができた。T. F. ヴァシリエフの書いた「クロンシュタットのマカロフ記念碑の科学的歴史的調査 1984年」という論文があり、それによると詩人のドミトリエフがこの詩を書き、詩は度々音楽と共に人々に愛されたとある。そこには「海軍中央古文書館」の資料によるとの記載があったため、更に「海軍中央古文書館」に出向き調べると、1914年刊行のドミトリエフの詩とヴァシリエフスクの音楽による楽譜を発見した。この楽譜を含め作曲者は異なるものの提督像の詩とはほぼ同じ詩を用いた楽曲の楽譜が4種類見つかった。そのうちの一つには、詩は新聞「ノーボエ プレミヤ」に発表されたとの記載があった。これらの楽譜のうち、最も検閲年月日が古いものは1904年4月12日。ということは、この詩が「ノーボエ プレミヤ」に掲載されたのはマカロフ提督が戦死した翌日1904年4月1日から4月12日までの間ということになる。

この時点でこの詩が啄木詩の意識である、とするゲザーノフ氏の説は否定することができた。何故なら、啄木詩は1904年6月13日に創作されている。そして、初出は『太陽』第1巻第11号、1904年8月だからである。

更にこのロシア詩の発表時期を明らかにするために、また、「ノーボエ プレミヤ」発表の詩であることを確認するために再度ロシア国立図書館で調べたところ、1904年4月7日の「ノーボエ プレミヤ」にこの詩を見つけることができた。マカロフ提督の死の1週間後に発表されたこの詩が提督像の詩の初出だったのである。しかし、ここにも作者名はない。だが、1914年にこの詩を基にした楽曲の楽譜が刊行される時に、何らかの方法で作者名を明らかにしたと思われる。その楽譜には、「収益金は MARIA・フェオドノブナ 皇后陛下の名により、海軍赤十字協会に納められる」との記載があり、国家による何らかの関与があったと推測されるからだ。

最後に残った問題は「ドミトリエフ」とはどのような人物か、というものであった。様々な事典や海軍会員名簿等、可能な限りあたって特定することはできなかった。もし、「ドミトリエフ」と「M. F.」の両者が同一人物とすれば、イニシャルにドミトリエフの「Д」が入るはずである。

この両者は別人であり、1913年の「クロンシュタットスキィ ベスニック」には「M. F.」のイニシャルで様々な記事が掲載されていることから「M. F.」とは新聞記者なのではないかと思われた。彼はマカロフ提督の命日に合わせ、追悼の意を込めて人々に広く愛された歌の歌詞を再録し、引用者の意味で「M. F.」というイニシャルを施したのではないかと。そして、翌1914年のマカロフ提督追悼曲の楽譜刊行の際、「ドミトリエフ」という名が探し出された。しかし、彼の詳細は判らないまま詩が人口に膾炙して今に至っているという結論に達した。

結局、マカロフ提督像に刻まれた詩は啄木詩とは無関係ということが判明した。啄木研究者としては残念ではあったが、間違った情報を後世に伝えるわけにはいかない。その点では研究者としての使命を果たすことが出来たと自負している。

この詩の調査のために2度、計3週間ほどロシアに滞在したことになるが、今でも思い出すのは、サンクトペテルブルグには国立図書館をはじめ古文書館、街の彫刻に関する博物館など、様々な形で驚くほど古い資料が保存されていることだった。100年も前の新聞をリクエストすると、茶色くなった新聞紙の大きな束がカウンターに届く。紙質が劣化しているそれを破らないように1枚1枚丁寧にめくりながら、朝から晩まで関係する記事を探したあの時が懐かしい。そして、閲覧室には、それぞれのテーマについて私と同じように古い新聞を丹念にめくっている人々が大勢いた。多分、研究者なのだろう。今はデジタル化が進み、さすがにロシアでも大判の新聞を抱えて机に向かうことも少なくなったかもしれないが、老いてもなお、真理を探究するために図書館に通う人々の姿に励まされながら、当時の私は研究の目的を達成することができた。

そして、この調査の経験は私のロシアへの関心を目覚めさせ、ゼミでは日露交流史を学生と共に学び、日露学生の交流のために毎年サンクトペテルブルグでの研修を行っている。国立サンクトペテルブルグ大学や国立サンクトペテルブルグ文化大学、そして583番学校を訪問し、学生目線での日本文化の紹介や、時に原発、北方領土という問題までも真剣に意見交換をし、日曜日には日露の学生で街歩きを楽しみロシア人家庭を訪問するこの草の根の日露交流は、15回を超える。そして、私個人の研究テーマも白系ロシア人文学の研究、チェルノブイリ原発事故を描いた文学の研究、ノーベル文学賞作家、スペトラーナ・アレクシエーヴィチの研究へと発展していった。私のロシアとの関わりはすべてこのマカロフ提督像に刻まれた詩の調査に始まっている。

これからあの時のサンクトペテルブルグの図書館や博物館、古文書館での探究心を忘れずに、悔いなく研究者生活を全うしたいと思う。



▲ベラルーシのノーベル賞作家、スペトラーナ・アレクシエーヴィチ氏と

ESSAY

米国留学と大学図書館

国際総合政策学科 准教授 武井 勲

私は米国に10年間住んだが、そのきっかけはワシントン州立大学への日本大学本部派遣交換留学であった。その翌年に、米国の大学院進学を目指していたので、とにかく勉強した。現地教員の推薦状が欲しかったし、TOEFLとGREのスコア、そしてライティング・サンプルも求められる。授業のリーディングや宿題だけで精一杯なのに、大学院受験を試みるなど、振り返ると無謀であった。しかも、高いGPAを取らなければならないので、毎日の授業も手が抜けない。学期も中盤でちょうど慌ただしくなってきた頃に、一度Pop Quiz(抜き打ちテスト)を出されて驚いたことがある。他の交換留学生がスポーツ実技や芸術の授業などを取って楽しんでいるのを横目に、まっしぐらであった。

大学図書館では本も沢山借りたが、静粛で長時間利用できる、貴重な勉強場所でもあった。学部生用のライティング・センター(Undergraduate Writing Center)では、無料で英文の添削や文章技術を教えてもらうことができた。講座担当教員のオフィスもよく訪ねた。毎日、新しい知識や情報を吸収していくのは楽しみであったが、常にクイズ(小テスト)や試験、ペーパーの締切が待っている。大学図書館は、慌ただしい毎日を乗り切るための拠点であった。

翌年、テキサスA&M大学社会学部の大学院に入学した。

ティーチング・アシスタント(TA)やリサーチ・アシスタント(RA)に就くと、専用のPCと研究室が与えられた。図書館で勉強する機会は無くなっていったが、授業や研究で用いる文献の多くは図書館に求めた。院生同士で同じ本を読みたい訳だから、せっかく借りた本をすぐにリコール(次の希望者が出た場合、借用期間が短くなる制度)されることもあった。私はテキサスA&M大学で3年間学び、社会学修士を取得した。

その後、社会学博士を取得したテキサス大学オースティン校(UT)では、5年間学んだ。人口研究所(Population Research Center)の研究員となり、多くの時間をそこで過ごした。普段はキャンパス中心部の総合図書館で事足りたが、強い日差しの中、広大なキャンパスを横切って、他の図書館に行くこともあった。

UTを卒業して早9年になるが、いまだに研究所を利用させてもらっている。昨夏、UTのキャンパスを歩いていてふと思った。「自分は昔、よくこんな遠くの国に来たものだな」、「素晴らしい大学で学べて幸せだった」と。若いときは怖いもの知らずということか。米国の大学院進学の原因は交換留学であり、夢中で勉強した。大学図書館を含めて、様々な施設やスタッフ、教員には随分とお世話になった。

ESSAY

文学と作曲家

ビジネス教養学科 教授 津山 智行

古今東西、偉大な文学は、天才的作曲家にも深い思索と感銘を与え、その偉大な文学を音楽をもって表現することを希求させ、シューマンのようにその完成に命を懸けた作曲家もいる。私は、高校・大学とオーケストラクラブでピアノを弾いていたが、大学に入って初めての演奏会で弾いたのが、チャイコフスキーの幻想序曲『ロミオとジュリエット』であり、大変思い出深い。この曲は、曲名の通りシェクスピアの戯曲『ロミオとジュリエット』を題材として作曲された演奏会用序曲であり、チャイコフスキーの最初の傑作という声も多い。楽壇にデビューしたばかりの若いチャイコフスキーはオペラ歌手デジレ・アルトーに出会って恋に落ち婚約したが、周囲の反対にあってアルトーは去り、別な男性と結婚。失意のどん底にあったチャイコフスキーに作曲家の大先輩バラキエフが『ロミオとジュリエット』を題材に作曲することを勧めた。チャイコフスキーはこの悲恋の物語に自分の悲恋を重ね合わせ、情熱的に作曲に取り組んだという。ロミオとジュリエットの恋を描いた第二主題の甘美なメロディー部分では、ピアノとイングリッシュホルンが最初に主旋律を奏するため、この部分は何回も練習したことを覚えている。

冒頭に紹介したシューマンは、ドイツの文豪ゲーテに心服し、ゲーテの詩や戯曲をもとに数多くの曲を作曲している。特にゲーテの劇詩『ファウスト』を題材として10年を掛けて作曲した独唱・合唱・管弦楽のための音楽作品『ゲーテのファウストからの情景』は、まさにシューマンの全精力と生命を注ぎ込んだ超大作である。シューマンは、『ファウスト』の最も悲劇的な部分で音楽と物語のただ中に自己を投影する手法を採り、シューマン自身がファウストになりきっていたと言われている。そのため、シューマンは当時最高の女性ピアニストである妻クララに深く愛されながらも、最後は精神を病み、46歳という若さでこの世を去ってしまう。シューマンの他にも、ベルリオーズ、リスト、グノーなどが『ファウスト』を題材にした曲を作曲しており、多く作曲家がその音楽化に挑戦してきた歴史がある。『ファウスト』は、『若きウェルテルの悩み』などと一緒に、小学校時代に子供向け翻訳で読んだ方も多いと思うが、ゲーテが60年をかけて完成したこの最高傑作を今改めて読んでみると、現代に通ずる様々な示唆があるのではないだろうか。

● FACULTY PUBLICATIONS

本学部教員の刊行物紹介



近世諸藩における財政改革—燎原編—
大淵 三洋 著 [八千代出版]

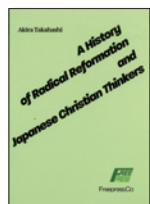
筆者は、前書『近世諸藩における財政改革—濫觴編—』（八千代出版社、2018年3月30日刊）の序章でも記述した如く、近世、換言するならば、江戸時代を財政的見地により、以下のように2区分した。

- (1) 江戸前期
(財政改革の濫觴期 1603年～1716年〔慶長8年～享保元年〕までの114年間)
- (2) 江戸後期
(財政改革の燎原期 1717年～1867年〔享保2年～慶応3年〕までの151年間)

上述のような区分をした理由は、徳川吉宗の「享保の改革」を分水嶺としたからである。江戸時代の財政改革を論じる上で、享保の改革が絶対的意義を保有しているといっても、過言ではあるまい。前書は、江戸前期（濫觴期）を分析研究の対象とした。未だ諸藩の財政赤字が、顕著になっていなかった時代における諸藩の財政改革の分析研究である。その結果、江戸後期（燎原期）と比較して、江戸前期の主要な財政改革者は、比較的少なかったといえよう。それに対して本書は、江戸後期を分析研究の対象としている。すなわち、諸藩の財政状況が危機に瀕し始めた時期である。江戸後期になると、質素倹約の徹底、家臣の俸祿の減額、大坂、京都及び江戸を始めとする大商人への借財、地場産業の振興と専売制等が財政改革の中心となってくる。

江戸後期を研究対象とする本書では、尾張藩、肥後藩、松代藩、米沢藩、松江藩、仙台藩、白河藩、庄内藩、姫路藩、薩摩藩及び長州藩の11藩の事例を採り挙げたが、諸藩の財政状況は様々で、その対応策も大きく異なっている。ただし、最後の長州藩においては、大きな財政改革が2度行われている事を考慮して、2つの章を割く事とした。

筆者が、「近世諸藩における財政改革」に関する2部作を執筆しようと試みたのは、諸藩の財政が困窮した事情と、財政改革に挑んだ人々の志や知恵、採用した財政改革策とその結果に、現代の財政改革及び財政再建の処方箋を求めたからである。



A History of Radical Reformation and
Japanese Christian Thinkers

高橋 章 著 [フリープレス]

I部の内容は、宗教改革が西ヨーロッパに起きた歴史的背景について述べる。宗教改革運動が起こる前のフスやウィクリフの運動や宗教改革運動は、その代表者であるルター、カルバンについてはよく知られている。ルターは、カトリック教会がその当時保持していた、ローマ教皇の権威、使徒継承権、免罪符などによって信者の罪がお金で赦されるなどの体制にプロテストしたわけである。神の言葉である聖書に信仰の基盤を置き、カトリック教会から分離した。カルバン、ツウイングリはスイスにおける宗教改革者として有名であるが、さらに宗教改革運動がスイスで起こった。それは、アナバプテスト運動であり、教会史上では、宗教改革急進派と呼ばれている。洗礼は教会が恵みとして幼児に与えるが、アナバプテストの人々は、受ける側の主体性を重視したのである。信者が受ける洗礼は、洗礼の意味を十分理解してから受けるべきであるとの主張のもとで、幼児洗礼を否定した。教会共同体も一人ひとり信仰告白の共同体として考えられ、信仰者の主体性が重んじられ

た。キリスト教史の中でも近代的要素が窺える。これらの信仰の態度のゆえにスイスにおいては、カルバン派からの弾圧を受けた。スイスからアナバプテスト運動は周辺のオランダ、フランスへもその広がりをみせ、運動の展開を明らかにした。（第1章—第3章）

アジアの中にある諸宗教の現状とキリスト教との出会いを、特にカトリックがアジアの諸宗教との対話を通して7つの主題を提起したことに触れて、その意義を明らかにした。（第4章）

次にラルフ・エマーソンの講演記録について、彼が5期に渡って講演した日時、場所、講演のテーマを明らかにした。（第5章）また明治期の札幌バンドの意義やキリスト教思想家を扱った。（第6章）

II部においては、キリスト教詩人八木重吉の生涯と詩の特徴について述べた。（第7章）さらに、札幌農学校二期生であった新渡戸稲造の生涯と武士道について、また内村鑑三の生涯と思想を紹介した。（第8章—第11章）

本書は以上のような構成となっている。



大陸関与と離脱の狭間で
—イギリス外交と第一次世界大戦後の西欧安全保障—
大久保 明 著 [名古屋大学出版会]

20世紀の二度にわたる世界大戦はなぜ起こってしまったのか。この疑問が、私が近現代史に興味を持つきっかけとなった。とりわけ、一度目の世界大戦の後になぜ永続的な平和を構築しえなかったのか、という問題について、イギリス政府の平和構築へのかかわりに興味を持った。イギリスのヨーロッパ大陸への関与の仕方が、平和の行く末に大きな影響を与えたのではないかと考えたためである。こうした問題意識のもとに研究を進め、博士論文をまとめ、それを基に本書を完成させた。

本書は、第一次世界大戦中の1916年を起点とし、1919年のパリ講和会議を経て、1925年のロカルノ会議へと至る、西欧に関するイギリスの外交・安全保障政策の展開を追ったものである。この時代のイギリスは、帝国防衛や国際連盟の設立など、世界大の政策を展開したが、本国の安全保障の要として、英仏海峡の対岸部にも強い関心を抱いていた。政府内では、フランスやベルギーとの戦時中の協力関係を戦後も継続するべきとの意見も表明された一方で、同盟によって再度戦争に巻き込まれることを懸念する声もあった。パリ講和会議では、英米仏、戦勝三大国による安全保障条約の締結がなされたが、アメリカ議会が講和条約を批准しなかったため、この条約は無効となった。イギリス政府は、アメリカが戦後秩序から身を引いたことに衝撃を受け、自らも西欧諸国との防衛協力に消極姿勢をとった。たとえば、1839年以来の西欧の重要条約であったベルギーの独立保証からも撤退することが検討された。一方でフランスは、ドイツの封じ込めを志向し、1923年のルール占領を頂点とする強硬な政策をとった。独仏の諍いがヨーロッパ戦後復興の障害要因となっていると認識したイギリス政府は、消極姿勢を改め、独仏双方への安全の供与によるヨーロッパ国際関係の融和を志向し始めた。この新たな政策志向は、西欧の現状を保証するロカルノ条約という成果をもたらした一方で、東欧の安全は保障されないなど欠点も残り、ヨーロッパを長期にわたって安定化させるには至らなかった。

20世紀の両大戦、ヴェルサイユ体制、イギリス外交等に関心のある方に手に取って頂ければ幸いです。

● 本学部教員の共著等紹介

書名（出版年月）	著者名等	出版社
Law and Justice in Japanese Popular Culture (2018年6月)	Richard Powell, Hideyuki Kumaki 分担執筆	Routledge
核兵器禁止条約の時代—核抑止論をのりこえる(2019年3月)	山口 響 監修（第7章著者） セイオム・ブラウン（第7章翻訳） 永井 雄一郎	法律文化社
特別活動・総合的学習の理論と指導法 (2019年2月)	関川 悦雄, 今泉 朝雄 編者 富士原 雅弘 分担執筆	弘文堂

※ 太字は本学部教員

所蔵資料紹介

Leviathan (1651)

Thomas Hobbes 著

国際教養学科 教授 平野 明彦

近代英国の代表的思想家の一人、トマス・ホッブズの歴史的名著『リヴァイアサン』の初版本が本学部図書館に所蔵されていることは、これまで本学部のパンフレット等で幾度か紹介されている。しかしながら、この本の希少性や所収の経緯については、ほとんど知られていないのではないだろうか。そこで、はじめに本書の出自について少しだけ申し述べたい。

本書、Thomas Hobbesの“Leviathan”は、1651年にロンドンのAndrew Crookeから出版された396頁からなる英語版であり、後にラテン語の版も刊行されている。周知のように、ホッブズの主要著作の多くはラテン語で書かれており、初版が英語で書かれたこと自体珍しいのだが、初版本ということになると、その文献学的(資料・骨董的)価値はいかほどなのか、筆者には想像もつかない。図書館の記録を遡ると、本書は昭和31年(1956年)に、西洋古典叢書を扱う神田の古本屋の草分け的存在の一つ「崇文荘書店」から購入したものとなる。当初購入金額を一瞥したときは、1651年に出版された初版本の中の、いわゆる偽版ではないかと疑わざるを得なかった。ところが、真正の初版とされる「首」(head)版、オランダで作られたといわれる通称「熊」版、さらに「装身具」のヴィネットの入ったものの3種類のうち、どうやら「首」版に相違ないようだ(一橋大学社会科学古書資料センター、ホームページ参照)。もちろん『なんでも鑑定団』の鑑定士ではないため、筆者には本版の真贋を見極める眼力は備わっていないものの、真正正銘の初版本と考えて差し支えないだろう。それにしても、この貴重な資料を当時どのように手に入れることができたのか、興味は尽きない。

すでに、『リヴァイアサン』やホッブズその人の業績について広く人口に膾炙しているとはいえ、その歴史的意義に関しては、いまだ十分に確定されているとはいえない。そこで次に、ホッブズの生涯、思想ならびにその今日的意義についてごく簡単に紹介させていただく。

ホッブズは、1588年にイングランドのマームズベリーで生まれオックスフォード大学を卒業、幾度かのヨーロッパ旅行の後、清教徒革命前の1640年にフランスへ亡命、そこでデカルトやガッサンディ達の知遇を得1651年末に帰国、その頃出版されたのが『リヴァイアサン』である。クリスチャンでありながらも、フランスの懐疑論と唯物論の、さらに英国経験論の祖F.ベーコンの強い影響を受けたホッブズは、従来のアリストテレス的な「目的論的自然観」に代わる「機械論的自然観」を唱導し、ベーコンの“scientia est potentia”[「知は力なり」]という言葉に世に広めたことでも知られている。本書『リヴァイアサン』が当時のヨーロッパ思想界

(のみならず政界・宗教界)に与えた衝撃は大変なもので、自然も動物も人間も一種の「機械」として説明され得るという唯物論的な主張と、当時のキリスト教の正統神学への徹底的な批判のゆえに、彼は、〈無神論者〉というレッテルを張られることとなった(リチャード・タック、『トマス・ホッブズ』、未来社参照)。また、国家(彼は別のところでそれをcivitasとかcommon-wealthと呼んでいるのだが)を、旧約聖書のヨブ記に描かれている「リヴァイアサン」という巨大な海獣に譬えたことが、王権神授説同様、絶対王政を強く支持したという印象を決定づけたのである。

こうしたホッブズの思想的影響は、政治学のみならずヒュームやカント等の批判的研究を介して、今日の欧米哲学にまで及んでいる。なかでも忘れてならないのが、1970年代以降、米国で〈正義論〉論争を惹起したジョン・ロールズによる社会契約説の復権に彼の思想が一役買ったことであろう。ホッブズに精通していたカント自身は、すでに18世紀後半に、ホッブズの社会契約を「根源的契約」として援用していたのであるが、いずれにしても契約説の今日的意義は看過できないだろう。

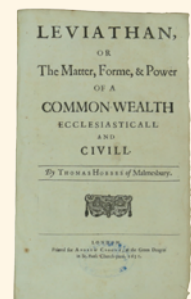
さらに本国イギリスだけでなく我が国においても、ホッブズの全著作を見直し、再発見する作業が進行中で、イギリスではオックスフォード大学出版から新たな著作集が、日本においては京都大学出版会を中心に主にラテン語原本から日本語への新たな翻訳が推し進められている。なかでも、2012年に伊藤宏之・渡部秀和両氏によってラテン語と英語から翻訳された『哲学原論、自然法および国家法の原理』(柏書房)は圧巻で、実に1700頁を超える大著である。こうしたホッブズ・ルネッサンスを通して、とりわけ我が国において、倫理的相対主義と自然的闘争状態を克服する社会契約説の意義が見直されると共に、従来主著として特別な地位を与えられてきた本書『リヴァイアサン』自体の全面的な再評価の機運が高まっていると言えよう。



▲歴史の波を潜り抜けてきた革の装丁



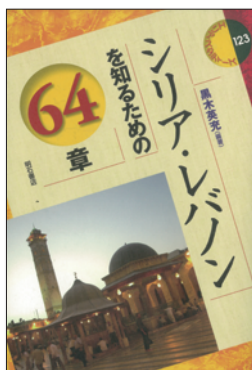
▲国家の絶対的支配を象徴する挿絵



▲真正初版本の証とされる首のヴィネット

教員による推薦図書紹介

●RECOMMENDED BOOKS



シリア・レバノンを知るための64章

黒木 英充 編著

[明石書店]

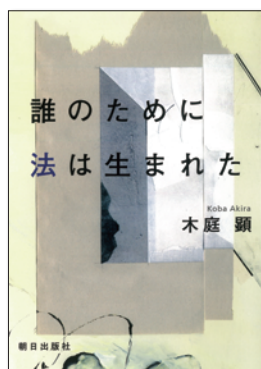
国際総合政策学科 准教授 小副川 琢

「シリア」、「レバノン」という言葉を聞いて、何を思い浮かべるであろうか。多くの人々が、「戦争」、「テロ」、「内戦」、そして「暗殺」といった単語と結びつけるのではなかろうか。確かに、両国共に、フランスによる「委任統治」から1940年代に独立して以来、政治的安定に恵まれた時期はそれほど長くはなく、マス・メディアなどの注目を集める出来事が多々発生してきたことは事実である。

他方、この2か国が位置する地域は豊かな歴史の伝統を誇っており、編者曰く、「地球上で最も古くから継続的に人間が住み続けている都市が多数ある」。事実、ダマスカス、アレppo、そしてバイルートなどを訪れると、イスラームはもとより、十字軍やさらには古代ローマの影響を肌で感じることができる。また、地中海に面しながらも、アジアからの交易路(いわゆる「シルクロード」)を擁していたために、東西文明が時には交じり合い、時には反発することで、文化の豊饒を生み出してきた。

こうした中で、シリア及びレバノン両国の歴史、政治、経済、社会、そして文化といった多様な側面について、分かりやすく解説をしている本書は、現状を理解する際に有益な「羅針盤」となることであろう。連綿と続く激動の歴史の中で、この地域の人々がどのように生きてきたのかを知ることは、国際政治に翻弄されることが多い両国が、したたかに「外交」を展開していることと無縁ではない。

本書はもちろん、30年間に及ぶシリアによるレバノン実効支配の終焉をもたらした、ラフィーク・ハリーリー・元レバノン首相爆殺事件(2005年2月発生)や、当初の「穏健な」反体制運動が「内戦」にまで至った、2011年以降のシリア情勢など、地域・国際的に大きなインパクトを与えている現代情勢そのものも扱っている。悠久の歴史に思いをはせながら、現在の両国を取り巻く状況について考えるには便利な書であり、手に取ってみたいかがでしょうか。



誰のために法は生まれた

木庭 顕 著

[朝日出版社]

国際総合政策学科 助教 菅野 直之

法は古代ローマで誕生した。そのことは、法学部で誰もが習うことである。それでは、ローマ人は、いつ、どのようにして、そして何のために法を作ったのか？

著者の木庭顕氏はローマ法の研究者であり、古代ギリシャ・ローマの社会構造の歴史的な分析によって、この問題を研究したことで知られる。本書には、その膨大な研究のエッセンスが注ぎ込まれている。

といっても、本書は、著者が中学生・高校生を対象として行った合計5回の特別授業を素材としており、決して難解なものではない。毎回、生徒たちは授業前に映画または文学作品を予習し、授業は、その作品をめぐる生徒たちと著者との対話形式で進められる。本書のタイトルである「誰のために法は生まれた」は、この授業の中心的な問いである。

この問いに対する著者の答えは明快である。すなわち、法は「追い詰められた最後の一人」(p. 63)のためにある。では、その「一人」を追い詰めているのは誰か？それは、個人を犠牲

にして利益を得ようとする、「グルになった集団」(p. 63)である。本書で扱われている作品は、成立した時代も場所も様々であるが、いずれも、集団の利益が優先されて個人が犠牲となるような社会に対する痛烈な批判を投げかけている。このような集団を解体して、一人の個人が大切にしているもの(例えば子供、あるいは精神の自由など)を守り抜く。法はそのために存在するのである。

このような集団と個人の関係こそが法律家の思考の出発点であり、こうした法の目的を実現することが、法律家の任務である。評者の専門分野である国際法も、その例外ではない(pp. 197-198, 371-376)。けれども、本書で取り上げられた作品の多様性からも分かるように、集団と個人の関係は、法律家だけでなく、社会に生きるすべての人々にとっての思考の出発点となるはずである。現代の日本社会や国際社会について考える時、本書の視点を欠かすことはできない。ぜひ本書を手に取り、本書で紹介されている作品にも触れてほしい。



私たちに必要なのはことばが必要だ フェミニストは黙らない

イ・ミンギョン 著／すみみ・小山内 園子訳

【タバックス】

国際教養学科 助教 陳 怡禎

2016年に韓国で起きた「江南駅殺人事件」について知っている人は、どのくらいいるだろうか。これは、ある男性が韓国の繁華街として知られている江南の公衆トイレに忍び込み、無作為に女性を選んで殺害していた通り魔事件である。犯人は逮捕された後、「日頃から女性を憎んでいた」と供述したが、その発言を受けて、多くの韓国女性が「被害者は女性だというだけで殺害された」と不安や怒りを爆発させ、フェミニズム運動を行い、韓国社会に蔓延していた「女性嫌悪」問題の深刻さを訴えるようになった。

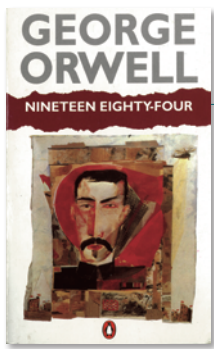
そのような動きの中、「私たちに必要なのはことばが必要だ——フェミニストは黙らない」という一冊の本が韓国で出版され、大きな注目を集めた。2018年に日本語翻訳版が出版されたので、是非この一冊をフェミニズム入門書として、学生の皆様にお勧めしたい。

本書は、フェミニズムの理論書ではなく、女性とは日常生活の中で「性差別」に直面する際に、どのように対応すべきかにつ

いてアドバイスをくれるマニュアル書だと言えるだろう。著者のイ・ミンギョン氏は、本書を通じて読者に伝えたいメッセージとして、「あなたには、自分を守る義務がある。自分を守ることは、口を開き、声を上げることからはじまるのだ」と述べている。

確かに、これまでの人生を振り返ってみれば、「空気を壊さないように沈黙し続ける」「不愉快を感じていても対応できない」のようなことを、誰しも経験したことがあるだろう。本書は実際のコミュニケーション場面を例としてあげながら、社会に根深く存在している女性嫌悪や蔑視等の性差別の実態を明らかにしたと同時に、その性差別にどのように立ち向かえばいいか、そしてどのように声をあげればいいのか、実践法を提示してくれている。

今まで沈黙を貫いてきた自分は決して悪くなかった。そのため、自分を責める必要はない。ただ、これから口を開き、自分自身が日頃苦痛だと思った経験を語り続け、そして立ち向かってください。これは本書が最も伝えたいメッセージではないだろうか。



NINETEEN EIGHTY-FOUR

GEORGE ORWELL 著 [PENGUIN BOOKS]

国際教養学科 助教 パウラ・マルティネス

“Fake news”, “post-truth”, constant surveillance... The world has completely transformed since George Orwell wrote 1984.

Thanks to the rise of the internet, it has become much easier for us to access all kinds of information. In fact, never before have we had so much information at our disposal. Yet, at the same time, never before have we been such easy prey to post-truth or fake news. After all, access to an unlimited amount of information does not necessarily mean that we are getting hard facts—at least not anymore. This hunger for instant information has nurtured the dissemination of fake news, often propelled by social media networks such as Facebook or Twitter.

George Orwell's 1984 is the story of Winston Smith, a clerk who works in the Records Department in the Ministry of Truth rewriting and distorting history. He lives in a

dystopian London, which is part of Oceania, one of the three big governments that exist in Orwell's book. The mysterious government of Oceania, whose party leader is referred to as “Big Brother”, uses cameras, TVs and listening devices to observe all of its citizens 24/7. However, little by little, Winston starts to fight against the repression of his own government by committing small acts of rebellion, such as keeping a diary—something punishable by death. However, in his search for “truth” he must be very careful, since Big Brother is always watching.

Published in 1949 and set in George Orwell's near future and our recent past, the message that 1984 delivers to us has not lost its force nowadays: How do we know what is real and what is not? Is it enough to know what is true and what is not if nobody cares to question it?



会計の世界史 イタリア、イギリス、アメリカ—500年の物語

田中 靖浩 著 [日本経済新聞出版社]

ビジネス教養学科 教授 佐藤 聡彦

著者は公認会計士事務所の所長であり、東京都立産業技術大学院大学客員教授も務め、また会計に関する著書を多数執筆し、講演活動も積極的に行っている。またこの本は、その副題の通り、会計の発展した地域についてのエピソードを中心にしているので、会計に詳しくなくても面白く歴史を知ることができるだろう。「儲かっているのかそうでないのか」を知るための取引の記録と公表に始まり、「もっと儲けるにはどうしたらよいのか」という経営視点へ向かう歴史的变化はもちろんのこと、原価計算など、利益を高めるためのコスト意識についても大まかに理解できよう。

この本は9章を3部に分けて構成されている。まず第1部の「簿記と会社の誕生」では、利益確定の方法と出資者の多様化を追い、第2部は「財務会計の歴史」として産業革命の象徴である鉄道の発達を契機とした現金主義会計から発生主義会計への移行、そして原価主義と時価主義の対立も扱う。この2

つの部を通して、簿記記録の発生したイタリアからオランダの資金を一般から募る会社の形へ、そして減価償却を考え付いたイギリスから海を渡ったアメリカでの公益性による財務開示へと、会計の進展を時系列で著している。

第3部では「管理会計とファイナンス」として、少し時代を戻してアメリカを中心に、会社が取り扱う物品や権利の価値、また会社自体の価値とは何かについての考え方を示している。例えば、「21世紀アメリカ 価値革命」と題する9章では、原価と時価の対立だけでなく、未来の価値をどう決めるかについても取り扱っている。ここでの企業買収における「のれん代」や減損会計等の説明は、今のニュース記事を理解する一助となる。

とはいえですが、「よくわかんないけど面白そうだな」くらいの気持ちでこの本を手にとって、ぱらっとめくってみてください。絵図や解説もあるので、経済や会社の「今」がわかりやすくなりますよ。



いま、拠って立つべき“日本の精神” 武士道

新渡戸 稲造 著／岬 龍一郎 訳 [PHP研究所]

食物栄養学科 助教 柿崎 博美

私が紹介する本は、新渡戸稲造が記した『武士道』です。新渡戸稲造は、国際親善の使徒として活躍し、真摯な教育者であったことが知られています。1900年に『武士道』（英文版）の初版が刊行されると、『武士道』は様々な言語に翻訳されベストセラーとなっていきます。本書はその現代語訳で、「日本人とは何か」を問い直し、失われつつある日本人の伝統的精神について世界文化と比較しながら体系的かつ総括的に書かれた思想書であります。

武士道とは、人としてこうあるべきといった道徳規範であり、たとえ国や民族が異なっても人が健全たる社会を築き、美しく生きようとするときの“人の倫（みち）”であり、人は自らを律する意志力といった具体的な理想を持たなければ、決して美しくも正しくも生きられないといった哲学を教えてください。

また、本書には教育についても書かれており、そこには克己心こそサムライに求められていた教育の根幹であると書かれて

います。私も、学生時代にこの本を読み、教師という職業に尊敬の念を抱きました。それは、「教師が授けるもの、つまり魂の育成というものは金銭では計れないものである」ということであります。この書の一説に、教える者が、知性ではなく品格を、頭脳ではなく魂を、ともに磨き発達させる素材として選んだ時、教師の仕事は神聖な性質をおびると書かれています。また、教師というものは常に心を平静に保ち、人より優れた人格を持ち、学識にも恵まれていなければならないと本書は教えてくれています。

本書は、若者たちや、武士道を忘れてしまった大人たちには是非読んでもらいたい一冊ですが、日本人のみならず外国の方たちにも日本人の心に浸透した伝統的精神について知ってもらうためのおすすめの一冊でもあります。この本を通じて、武士道の素晴らしさを再認識し、日本人であることに誇りを持ってほしいと思っています。

STUDENT'S VOICE

「懐かしさ」を感じる場所

国際総合政策学科3年 岡田 実凡

「図書館」という3文字を見て、あるいは「図書館」という言葉を聞いて、まず思い出すものは何だろうか。私は自身の幼少期を思い出す。幼稚園や小学校低学年の頃、週末になると毎週のように母が図書館に連れて行ってくれた。当時の私の楽しみは、幼児や児童向けの絵本が置かれているコーナーでイラストがかわいい絵本を探し、それを読んだり借りて帰ったりすることだった。初めは絵本を借りても誰かに読んでもらうことが多かったが、字が読めるようになるというのの間に自分で本を読むことが習慣になっていた。また、絵本だけでなく、漫画で学べる『日本の歴史』シリーズや『世界の伝記』シリーズも読み漁っていた。月に1回、通っていた小学校に移動図書館が来る日を楽しみにしたり、学校の図書館で雨の日に本を読んだりしていた頃が懐かしい。

小学生の頃は本を読むことが生活の一部のような感覚だったが、中学生になる頃にはあまり本を読まなくなっていた、というよりも、勉強や部活のため本を読む時間を見つけることが難しかったのである。そしてこれは高校生になってもそうだった。図書館の利用は続けていたが、その目的は「読書」のための利用から「勉強する場」へと変化していた。しかし、特に高校生の頃は静かで落ち着く図書館が学校の中でお気に入りの場所の一つで、大学生になった今でも図書館を頻繁に利用している。読書は私の趣味の一つではあるが、授業の課題や資格取得のための勉強など、集中して取り組みたいときは図書館に来てそれらに取り組んでいる。特に2階に設置されている自習

室は一人で勉強できるような机が仕切られており、課題に没頭したいときに打って付けの場だ。また、大学の図書館が休館日のときは、市営の図書館に行くこともある。最近の楽しみの一つは、自身が幼少期に好きだった絵本や今でも印象に残っている本をもう一度読んでみることだ。何年かたった後に読んだことがある本をもう一度読むことで、自身の物事の捉え方の変化や成長などに気付くことができ面白い。

では、本誌をご覧になっているあなたが図書館を最後に利用したのはいつだろうか。本を読むことで新たな知識を得たり、自分とは異なる価値観を持つ人と出会ったりすることができる。また、図書館に置かれている雑誌や新聞などからは情報を得ることもできる。「本」から学べることも多いため、今週末にでも図書館を訪れてみてはどうだろうか。



国際機関資料室から

INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

日・EUフレンドシップウィーク2019
「フランス文学の旅」開催

EU情報センターを併設している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパ・デーを記念して、日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は、5月9日(木)～9月30日(月)まで、図書館1階閲覧室において、「フランス文学の旅」と題した展示会を行いました。メインはフランス文学を研究されている高塚先生のアルベール・カミュ、橋本先生のギュスターヴ・フロベールの研究と作家に関する先生方の貴重な資料の展示でした。その他、12人の著名な作家とその作家にまつわる土地を紹介するパネルが閲覧室の入口付近を華やかに彩り、当学部が契約しているデータベースBritanica IMAGE QUESTからダウンロードした美しいフランスの都市や世界遺産の写真は、まるでフランスに行ったかのような気分になりました。

恒例のクイズでは、EUとフランス文学に関連した問題を出題し、正解者には駐日欧州連合代表部から提供された帽子やファイル等のEUグッズと当館で購入している雑誌の付録を景品として進呈しました。

今回は、EUのイベントとして初めてフランス文学に焦点をあて

たことで、先生方の研究に改めて触れることができ、当館で所蔵している豊富なフランス文学の書籍を紹介することができました。今後も学生を始めとする来館者がEUや加盟国についてより興味をもっていただけるようなイベントを企画していきたいと思っています。



図書館ニュース

BIBLIOTHECA

第15号

通巻第160号

発行日／2019年10月1日

編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会<https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/>